入試相談

公募制推薦入試「基礎学力試験対策講座」

CAMPUS TOPICS
キャンパス✚トピックス

大学

第2回 オープンキャンパスに過去最高の4,632人が参加

7月24日・25日、第2回オープンキャンパスを開催しました。今年4月に学部を再編、長久手・星が丘両キャンパスに新棟・新館が開設されたこともあり、沖縄を含む全国各地から訪れた人の数は両日合わせて4632人。ひとしお厳しい猛暑にもかかわらず、昨年を433人上回る過去最高の来場者数を記録しました（保護者など付き添い者は除く）。

当日実施された全体説明会には大勢の参加者が集まり、大スクリーンを配した教室に立ち見が出るほどの回も。キャンパスツアーは在学生スタッフが体験談を交えながら案内。体験コーナーでは、ソシオメディアラボのミニ・ニュース番組「公開模擬収録」も人気を集め、人間情報学部の実験室・演習室に装備されたバーチャルリアリティや3次元CG作品を制作するための高性能機器を見学した高校生たちは興味津々の面持ちでした。

毎年好評の模擬授業は、英語の意外な学習法や新しい楽しみ方など、各学科・専攻のユニークなレクチャーを参加者は熱心に聴講し、国際交流活動の現状と課題を取り上げた分かりやすい講義では活動の実態と大切さを実感しているようでした。

学科（専攻）相談をはじめ、入試、大学生活、卒業後の進路・就職、留学などについての各種相談コーナーでも、質問を投げかける参加者と、教職員や在学生スタッフが一つひとつ親身に答える姿が印象的でした。

昨年に引き続き、公募制推薦入試の「基礎学力試験（国語・英語）対策講座」を両キャンパスで実施し、本学教員が模擬問題集などを用いて問題文を素早く理解するコツや解答の導き方などを分かりやすく解説。聞き入る高校生たちの真剣なまなざしからは、将来の進路を見据えながら近づく入試に取り組む真剣な表情が伺えました。

スペシャル企画は、各学部・学科（専攻）が総力をあげてイベントを実施。福祉貢献学部・子ども福祉専攻はロクロ体験コーナー。メディアプロデュース学部・都市環境デザインコースは「隈研吾展」の愛知巡回展を誘致するなど（左ページ参照）、各イベント会場も賑わっていました。

模擬授業（スポーツ・健康医科学科）

学科・専攻相談（交流文化学部）

ロクロ体験（子ども福祉専攻）

大学

2009年度 留学生別科修了式

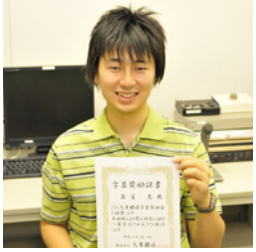
2009年度留学生別科修了式が5月14日に国際交流会館（アイハウス）で行われました。12人の修了生および1人の認定者が本学での留学生活の思い出を胸に式に臨み、小林学長からそれぞれ修了証書と認定書が授与されました。

修了生を代表しオックスフォード・ブルックス大学（イギリス）のELLIOTT Nicholas Robert（エリオット　ニコラス　ロバート）さんがスピーチをし、留学中に経験したさまざまな出来事を交えながら、9ヶ月間の留学生活を支えてくれた別科教員、友人、国際交流センタースタッフへの謝辞を日本語で述べました。小林学長からは本学別科で学んだことを生かし、帰国後も日本と母国の友好の架け橋になってほしいと、修了生・認定者の今後の活躍に期待を込めお祝いの言葉が贈られました。

修了式後は記念撮影とパーティーが行われ、修了生は教員やクラスメートたちと思い出話に花を咲かせていました。

大学

心理学研究科院生の蔵冨恵さんが大幸財団の学芸奨励生に



大学院心理学研究科心理学専攻博士前期課程に在籍する蔵冨恵さんが、財団法人大幸財団の平成22年度（第30回）学芸奨励生に応募して、見事に選出されました。

大幸財団の学芸奨励生制度は、学術研究・文化の振興を図る目的で、優れた若手研究者の萌芽的・独創的な研究を助成し、将来有為な人材を育成するために設けられており、奨励生には奨励金が給付されます。

蔵冨さんの「人間が情報処理を行う前に行われる、情報選択の方略（認知的制御）の程度を競合適応効果という指標を用いて、ラテラリティ（大脳半球機能差）の視点から検討する」という研究テーマは、独創的で高い評価を受けました。

「今回、選出されたのは指導教授の吉崎一人先生をはじめ、周りの方々からの支援があったからこそです。本当にありがとうございます。これからも、研究に励み、学会や研究論文で発表を通し、研究成果を挙げられるよう努めていきたいと思います」と話してくれました。

大学

東西のしらべ－交流文化学部開設記念コンサート

初夏の気配を感じさせる6月3日、交流文化学部開設を記念し、「東西のしらべ」と題した記念コンサートを星が丘キャンパス2号館講堂で開催しました。

出演者は、中国琵琶に上海音楽学院客座教授の涂善祥氏、二胡にトロントロイヤル音楽院二胡科教授のジョージ・ガオ氏、ピアノにモスクワチャイコフスキー音楽学院客員教授のヴァネッサ・ヴァネッリモーゼル氏、ソプラノに国内外に出演されている矢野留美氏と、ワールドワイドに活躍されている各国の著名な音楽家の方をお迎えしました。

中国古曲からイタリアのカンツォーネ、クラシックギターの名曲、日本伝統曲など、さまざまな幅広いジャンルを見事なアンサンブルで演奏していただき、一曲終わるごとに観客からは感嘆の声と大きな拍手が起こりました。

4人の音楽家の奏でる、ジャンルや国、時代を越えた素晴らしいしらべは、本学の教育姿勢である「伝統は、たちどまらない」、理念である「違いを共に生きる」に通じるものであり、交流文化学部開設を記念するコンサートとして、大きな意義のあるものになりました。

隈 研吾展
Kengo Kuma Studies in Organic
愛知巡回展
7/24 ～ 8/8
都市環境デザインコース
プレゼンテーションルーム

都市環境デザインコースでは、年に一度のメインイベントとして、世界的に活躍する建築家の展覧会を誘致し、その会場計画をコース学生が行っています。11回目の今回は、建築家・隈研吾氏が主宰する隈研吾建築都市設計事務所の近作の展示会を開催しました。会場計画は前期授業「計画演習Ⅲ」を受講する36人の学生が手掛けました。

展示作品は、「contour」「texture」「organic」の3つのジャンルに緩やかに分かれ、スタディ段階の小さい模型から実施段階の詳細な模型、さらに、実物の25分の1サイズの巨大な「ブザンソン芸術文化センター」「グラナダ・パフォーミングアーツ・センター」の模型を展示しました。

実際の建築ができあがるまでには、様々なスケールで、紙面あるいは模型のような立体的な把握がなされ、惜しみなく試行錯誤が繰り返されます。そのプロセスをみせることが展覧会のテーマとなりました。

また、隈氏がデザインしたプロダクトを使用した会場構成も今回の展覧会のオリジナルとなりました。変形ポリタンクをブロックのように組立てる「ウォーター・ブランチ」、アルミニウムのカードを三角形に組立てる「ポリゴニウム」の2作品です。「竹の庭」「ブザンソンの光壁」、ポスターを再現した「カヴァマーケットの採石場」など学生たちのアイデアも光る展示空間となりました。

会期中7月31日には隈研吾氏の講演会も開催し、650人以上の来場者を迎え大盛況でした。隈氏の事務所創設当初から現在までの建築に対する考え方を多数のスライド写真でお話いただき、大変有意義な時間となりました。

落選展
Salon des Refuses met
6/22 ～ 7/15
都市環境デザインコース
ミニギャラリー

「大建met」は、岐阜市を拠点に活躍する一級建築士事務所です。すでに多数の実施設計を行っていますが、すべてのアイデアがかたちになってきたのではありません。いくつもの空振りがあり、それが糧となっているのです。展覧会では、その落選案をありのままに展示いただきました。

落選案とはいえ、コンペ主催者や審査員への説得材料となりますから、プレゼンテーション用のパネルや模型は見応え十分です。大建metの建築には、つねに社会への提言が込められ、材料や工法に関する新たな提案もありアイデア満載です。緻密に制作された模型は、のぞき込むだけでも楽しく、そこで起こることを想像できます。

また、近年竣工した「すごろくハウス」は、落選案ではありませんが、メイキング映像とともに出品されました。建築がその土地に根ざして基礎部分からつくられていくのとはまったく違う、工場で組立てられたコンテナのように、建物が移動してきて突然着陸する、その一部始終をみることができました。

大学

メディアプロデュース学部 都市環境デザインコースが 学内ギャラリーで展覧会開催

こどもとデザインの３つの展覧会
4/13 ～ 5/6
都市環境デザインコース
ミニギャラリー

「こども」をキーワードとした3つの展覧会への出展作品を集めました。

「found 1000-seeds works 展―千の種あかし隊の8年―」は、子ども建築研究会（名古屋大学小松尚研究室＋名古屋市立大学鈴木賢一研究室＋千種区役所）の官学協同プロジェクトの成果報告展です。「千の種」というのは、千種区の様々な魅力を発見するという子ども参加のワークショップで、これまで多くの子どもと地域住民が関わってきました。緑豊かな千種区の森で秘密基地をつくる、ゴミ処理場の見学、サイクリングでまち巡りなど、子どもが街と関わるプロジェクトを多数実施しています。

「キッズデザイン賞2010―コミュニケーションデザイン分野―」は、「だがねランド」（財団法人名古屋都市センター＋名古屋市立大学鈴木賢一研究室）の取組みが紹介されました。子どもたちが自治区をつくるというユニークな試みで、段ボールなどの身近な素材で建物をつくり、「だがね」（お金）を流通させ、社会のしくみをシミュレーションしています。

「キッズデザインchapter Ⅱ―プロダクトデザイン編―」は、本学都市環境デザインコース清水裕二研究室の3年生による、シンプルな遊具の提案です。段ボールでつくった名古屋城を洋服のように身につけ頭にシャチホコ帽子をかぶる、誰でも簡単「なりきり名古屋城」、段ボール製の恐竜パズル、段ボールの強度を考えた馬の椅子など、身の回りのもので工夫して遊ぶアイデアがかたちとなりました。

高等学校
中学校

2年ぶりに 中国訪日団が来校

7月11日と20日、中国江蘇省南京市の金陵中学河西分校から、生徒117人と付き添い教員4人、南京市教育委員会委員2人が来校しました。3年生は進学のためのテスト勉強で忙しく、中学1、2年生と高校1、2年生が訪れました。昨年は新型インフルエンザで中止となったため、今回で2年ぶり4回目となる訪日です。

センテナリーホールでの歓迎式典に続き、中高生徒会執行部が校内を案内し、カフェテリアで交流会を行いました。本校生徒はフルートやギター、マンドリン、箏曲の演奏で歓迎し、中国側は日本語を独学で勉強している生徒の日本語での挨拶や、上海万博の歌の披露などがあり、盛り上がりました。プレゼントの交換では、本校からは学園祭のTシャツなどを贈りましたが、中国から立派な掛け軸をいただいた生徒もいました。

短い時間でしたが、中身の濃い交流ができたようです。メールアドレスを教え合い、今後も連絡を取り合う約束を交わす生徒もいました。

CAMPUS TOPICS
キャンパス✚トピックス

大学 小林学長が地域連携シンポジウムに出席

6月28日、長久手町の愛知県立大学において「地域連携シンポジウム」が開催され、小林素文学長がシンポジストとして出席されました。

このシンポジウムは、愛知県立大学を代表校として、本学と愛知県立芸術大学、名古屋外国語大学、名古屋学芸大学を連携校とした文部科学省の戦略的大学連携事業の一環として開催され、連携5大学の各学長のほかに、日進市の萩野市長と長久手町の加藤町長もゲストスピーカーとして参加されました。

今回は「大学は地域にどのように貢献を進めるか」というテーマで、中日新聞の志村編集局長がコーディネーターを務め、各大学の学生と教職員による地域貢献の取り組みの発表と共に、将来に向けた大学と行政の連携の取り組みのあり方について熱心な討議が行われました。

小林学長は本学の学生の活気あふれる多様な地域貢献活動を紹介し、今後の展望として、大学の教職員・研究成果・学生の3つの要素が、必要に応じて地域貢献するためのトータルサポートシステムの必要性と共に、「地域から世界に向けて発信できるような若者のパワーの大きな可能性と成長を期待したい」と提言されました。

中学校 2010愛知県私立中学校進学フェア開催

夏の恒例行事となった「愛知県私立中学校進学フェア」は今年で11回目、本校を含む県内の私立中学校20校が参加して、7月24、25日の2日間、松坂屋南館にて行われました。

長引く不況の影響が懸念されましたが、中学受験に対する世間の関心は引き続き高く、全体の入場者は2日間で延べ9368人（昨年比105%）と昨年を上回りました。各校のブースには、入試や校風について熱心に相談する保護者や受験生がひっきりなしに訪れ、2日間とも会場全体が熱気に包まれていました。

1階のオルガン広場で各校クラブのステージ発表が行われたのに加え、今年から各校制作の動画モニターが会場エントランスとオルガン広場の制服コーナーで流され、個別相談会と併せて私立中学校を知っていただくよい機会になりました。

受験を控えた6年生ばかりでなく、5年生以下の児童と保護者の方の参加も多く、本校については進行中の中高完全一貫体制についての期待や質問が多く聞かれました。

高等学校 昨年に続き、1年生が「思索と対話の春合宿」

昨年に引き続き「思索と対話の春合宿」を4月14～16日、高山市荘川町のオハヨーサンホテルで実施しました。

1日目は大学2～4年生の卒業生7人が参加し、大学生活や進路選択について話してくれました。その夜から早朝にかけて雪がしんしんと降り、2日目のハイキングでは新雪を踏みしめることができました。

3日間の合宿で15年間の人生を振り返り、これからの15年間を展望する「思索と対話の春合宿ノート」ができ上がりました。一人ひとりの高校生活が、自分の描いた「15年の設計図」にできるだけ近いものになることを願っています。

※「思索と対話の春合宿　ノート」より

「思索と対話」ということは私はどちらも苦手でした。頭の中で自分なりに考えることはできるけど、それを言葉にするのは苦手だし、対話は私は人見知りなので、すごく不安でした。でもやってみると意外とでき、対話の時間は普段は絶対に話すことがないような子と話ができてとても嬉しかったです。勉強も一切なく、自分のことを考えることができて、すごくこれからの人生に有意義で貴重な時間になったと思います。

中学校 オープンスクールに約2,500人が来校

ミニ体験授業（理科実験）

ミニ体験授業（織物）

5月29日、一学期最大の行事である中学校のオープンスクールを開催しました。中高キャンパスの見学や、進行中の中高完全一貫体制に対して大きな関心が寄せられており、今年も2500人近くの親子が来校されました。

参加者が多いため、大アリーナでの全体会を2回に分けて行い、同時並行で校内見学・ミニ体験授業を実施しました。全体会では、イメージキャラクター〝さくらちゃん〟が中学校生活を案内するビデオ「実りある6年――愛知淑徳」を上映、学校長あいさつ、入試説明、3分間スピーチと簡潔な形式にし、同様な内容を2回実施しました。

校内見学では校舎全体が多くの小学生と保護者で賑わい、中1・中2の教室および特別教室では、教科ごとにミニ体験授業（百人一首、民族衣装体験、数学パズル、理科実験、英会話、織物）を実施。また、各種のクラブ活動の参観とあわせて、一部のクラブで実技体験コーナーを設けましたが、多くの小学生が楽しそうに参加する姿が見られました。

今年も中3の生徒全員が登校し、教育実習期間中の卒業生とともに会場係や案内係として、しっかりと役割を果たしてくれました。

なお、この時期に運動会を実施する小学校も多く、本校を志望しているにもかかわらずオープンスクールに参加できないという声もあったため、6月19日に第1回ミニ見学会という形で記念講堂を主会場として見学会を実施したところ、約600人が参加されました。また、夏休みに入った7月30日に実施した第2回ミニ見学会にも60人以上の参加があり、本校に対する関心の高さがうかがわれました。

SH 高等学校　JH 中学校

四泊五日で立山・五色が原へ夏山登山

体力増強、自然体験を目的に、中高の希望者が参加する夏の恒例行事、夏山登山。今年は7月26日から30日までの四泊五日、立山・五色が原へ生徒37人、引率教員6人で出かけました。

初日は、弥陀が原の豊かな自然を車窓から眺め、立山室堂へ。2日目は北アルプスの稜線へ向けて出発し、雄大な立山の景色を楽しみつつ、一の越山荘に着き、荷物を置いて雄山山頂を目指しました。遠く槍ヶ岳も望めるほどの好天に恵まれ、山頂で昼食を取ったあと、一の越へ下りました。

3日目は五色が原に向けて出発。たびたび現れる巨大な雪渓で涼むと共に、高山植物の可憐な花々の美しさを堪能しました。五色が原山荘は猛暑の下界に比べて別天地で、快適な一夜を過ごすことができました。

4日目は小雨の中を出発。ザラ峠からの苦しい急登をあえぎながら50分ほど登り、振り返るとはるか遠くの鞍部には熊の姿が。熊は餌に夢中で、ほかには関心がないようでした。獅子岳のあたりから風雨が強まり、龍王岳の登りでは強風に苦しみながら、生徒たちは互いに励まし合って乗り越え、一の越山荘へ。室堂へ向けての下りでは風雨も弱まり、雷鳥荘へ到着。温泉で体を温め、旅の疲れを癒しました。

夜のミーティングでは、6年間参加した高3生徒の表彰を行い、全員で皆勤を讃えました。

最終日は立山カルデラ博物館で雄大な立山の自然を学び、帰路に着きました。

SH 高等学校　JH 中学校

木曽福島でイングリッシュセミナー開催

8月21～23日、木曽福島でイングリッシュセミナーを行いました。これは英語のコミュニケーション能力向上を目的に、中2から高1までの希望者を対象に行っている恒例行事で、5回目となる今年は生徒46人が参加しました。

到着後、バスを降りるとすぐに英語で指示が出され、早々とプログラムがスタート。生徒4人とネイティブ1人の1グループごとに、グループネームを考えて発表する、お芝居を考えて発表する、1分間にどれだけの英文を覚えて話すことができるかなど、夜の9時までさまざまなプログラムにトライ。学習的な内容のあとにはゲームをしたり、英語の歌を歌ったりなどメリハリがあり、生徒は楽しみながらも集中して取り組んでいました。

このキャンプでは3つのルール「Smile」「speak English」「make mistakes」が示され、特に3つ目の「たくさん間違えること」はとても生徒を勇気づけたようです。間違えてもいいから積極的に「伝えよう」という姿勢が身につきました。

公民館でのセミナーを終えると、夜はペンションへ。食事の時間などもすべて英語で過ごし、生徒は普段の授業とは一味違った英語漬けの3日間を堪能したようです。

ミニ登山

五平餅作り体験

JH 中学校

2年生が高山で二泊三日の林間研修

5月のゴールデンウィーク明けに実施している中2の林間研修は、1泊目を高山市一宮町の民宿にお世話になるようになって4年目になりました。今年も都会での便利な日常生活を離れて、久々野町も含めた農村に分宿し、自然に囲まれたくさんの体験をしてきました。

A班は5月10～12日、B班は11～14日の2グループに分かれて実施。1日目は道の駅「モンデウス」前での入村式のあと、位山へミニ登山、澄んだ空気の下、美しいアルプスの山並みが眺望できました。その後、それぞれの民宿に分かれて、五平餅作り、そば打ちや岩魚つかみなどの食体験を楽しみました。

2日目午前中は田植え体験。初めは泥田の中に不安気な面持ちで入って行った生徒たちも次第に夢中になって、用意された田んぼにしっかりと苗を植えてきました。今年も秋に収穫できたお米を学校に送っていただいて、家庭科の調理実習に使う予定です。

1泊の体験でしたが、民宿の方との交流も深まり、普段の生活では得られない貴重な体験ができたようです。

2日目午後には淑友館に移動して、ファイヤーなどを通じてクラスの友人たちとのコミュニケーションを深めました。夜には静かな雰囲気の中で「家族への手紙」を書き、日頃の生活を振り返るよい機会になったようです。

3日目に高山でグループ見学をしたあと、帰路につきました。

SH 高等学校

フィンランドからの留学生が帰国

昨年9月から本校に留学していたフィンランドの留学生、アンナ・サハラコルピさんが6月に帰国しました。

日本好きだった母親の影響で、日本の伝統文化に興味を持つようになったアンナさん。2年前に旅行で訪れた名古屋を「きれいな街」と気に入り、留学を決めたそうです。

ロータリーのメンバーの家にホームステイしながら、本校へ通学。「淑徳高校はとても広くてきれいです。生徒は優しく接してくれて嬉しかった。先生方もとても優しくて、教え方も上手でした」

日本の歴史や文化、日本語などを学ぶ特別編成のカリキュラムを受け、「今は平安時代の藤原氏について勉強しています。日本史は面白いですね」と目を輝かせて話してくれました。

部活は剣道部と茶道部、華道部に所属。「剣道部では試合もしました。武道の精神が好きです。帰国しても、日本語の勉強と剣道は続けたいと思います」

国ではスウェーデン語、英語、フランス語、ドイツ語を学んでいた語学堪能なアンナさん。日本語をマスターするため、「部活の後、毎日1時間、休日は予定がなければ一日中勉強しました。勉強が好きですから」と、来日時に比べて格段に上達した日本語で話してくれました。

九州への修学旅行や球技大会などの学校行事、休日には各地の観光地、また、同級生と買い物に出かけたりと、10か月間、日本の生活を満喫できたようです。

帰国後は高校に復学し、大学では法律と経済を学ぶ予定。「将来は日本語を使った仕事もできたらいいですね」。